

「男の生き方十人十色」

新宿区 笹本弘子

「ジェンダー・フリー講座」に、平成維新を実現する都民の会から、山崎・澤井・吉岡・近藤・笹本の5人が参加しました。

9月10日、東京ウイメンズプラザホールは、いつもと少々違う雰囲気でした。いつもならほとんど女性、その中に2～3人の男性という感じなのが、今回は約半分が男性。タイトルが良かったのか、抽選が男性に有利に扱われたのか。私達も10人申込み中男性5人が当たり、来れなかった江崎さんの代わりに私笹本が女一人参加出来た訳ですから、そうとうきびしい状況（女性には？）。しかしこれだけ理解ある男性、又は理解しようとしている男性が来られているという事は、希望がもてるのではと胸がふくらむ思いでした。

パネラーは、江原由美子（都立大教員）、渡辺秀樹（慶応大教員）、細谷実（関東学院大教員）水口義朗（婦人公論編集長）というメンバーでしたが、出来れば日本で初の育児休業をとった男性とか、社会的活動をしている人、介護ヘルパーとして働いている男性等のパネラーも欲しかったというのが私達の意見です。

- ◆女性問題をわかってもらうには、男性のライフワークを考えながらという事もある（水口）
- ◆仕事と家庭の関係をうまく保てば、サラリーマンでも意識行動しながら自然とやってゆけるはず（渡辺）
- ◆洗濯が出来て料理が出来れば女性はいらぬ。今の世の中はハングリー精神がなくなっており、

男と女の壁も低くなっている。男女の共存という考えは、特に言い出さなくても若者は自然とそうになっている。一部の人を除いては…（細谷）

- ◆子供を育てるのは女性という考え方を持っている男性が多いが、子育てこそ共にやってゆかなければならない。自分の遺伝子を残せなくなったような3高なんてもうもてはやされない。結婚してもセックスレス、家事も育児も手を貸さないでは妻や子を守るオスとしての働きが弱ったのでは…（江原）

等々意見がいろいろ出されました。

つまり性差、共存、自分らしく生きようという事なのですが、社会通念や習慣の中で、生きにくいと感じているのでは。

最後に、ギャラリー側からの発言で、維新の会の山崎さんの「男女の溝があると言うが、キャリアを全うしたい、いい人がいれば結婚したい、男も女も考える事は一緒である。みんなが変わらなければ世の中も変わらない。特にパートナーとしての支えあいが大切。女性のキャリアを全うさせるには0才児の保育所の問題や、出産で仕事を中断する事によって元の仕事に戻れない現状がある。企業、行政、社会的バックアップが必要で、男も女も会社も変わらなければならない。労組もそういう所に入力してゆかなければならないのではないか。」という意見で、大きな拍手がありました。

意識は変わりつつあるが、制度はまだ未熟です。一人一人の力で共に助けあってゆきましょう。

ニッポン民主主義政治の疲労

生活者（少数派）に基盤を置いた民主主義をきづく

神奈川県 白瀬武美

政治は、今日まで多数決はつねに正義につながると思われてきた。その考え方を根本的に見直す時期がきたことを国民は考えなければならない。民主主義に於ける民主政治は多数決を求める闘いではあるが、しかしこの闘いの中で支配される側の少数派はつねに排除され、益するところがない。多数派を保護する政治から、少数派の意見をも救済する新しいルール造りを何処かに築いて置かなくては、国民は政治から去っていく。

これからは、多様な少数派市民がどんどん存在する時代である。旧来伝の多数決主義、あるいは多数派そのものをつくりだす行動様式の手法は破綻し岐路を示していることを認識すべきである。今日の連立政権に見るかぎり、必ず多数派が維持できるという保証の時代は終わりを告げている。一政党による単独過半数を集めることも困難な政局の中、政党政

治は既に疲労し多数派信仰の根拠は崩れた。この現象を生活者は政治的に対応し、法的保護の下での論議を高めつつ国民の権利と機会を獲得すべきである（例えば、国民投票での）。この現象を生活者或いは少数派市民は、新しい民主主義（直接民主主義）を考察していく起爆剤として、真の民主政治の改革を求める市民運動を展開させていくことである。

一方、この国の不安材料が見え隠れしている問題と国民が持つ古層（歴史的国民性）について考えてみたい。一億総民主ボケの国民に、本当にこの国を変えていけるのか、変革は起こせるのか、今日、改革さえも必要なく現状（偽りの社会）に満足している国民は何を考えているのかという疑問が残る。

まったく未来が見えてこない「背骨の無いコノ国ニッポン」についての不安である。戦前、天皇主権という背骨で国家運営されていたが、戦後の自由平